末汲て千世もへなゝん仙人の住や山路の菊のしたの水○圖略

〔三養雜記二〕酒を戒むる隱語の盃銘

又筑紫なる人のもとより、玄るしおくられたる盃の銘に、○圖略ある盃にかくの如く○なま木のばこさいく書つけたるあり、こは謎のはんじものにて、永祿天正のころ、もはら世にもてはやしける、酒をいましむる隱語にて、工人の箱を造るに、すみがねを正しくつくりたりとも、生木にてつくればあひ口たがふものなり、されば此の大盃にて飲ときは、心正しき人にても、口のたがふことたびたびあるものぞかし、とのいましめなるよし、いひおこせたり、

盃箱

〔當世誰が身の上一〕讓申身の内の財

角て聟の家には、祝言式々につとめ、それより五日は五座敷、七日は七はな跡ばりの振舞、此取込いつか終らんと思ひしに、段々不殘すんで、今日といふけふ盃箱に納り、○略下

〔堀川後度狂歌集三秋〕九月九日　村雲

菊の花見に來る客に箱入のきせ綿とつていだす盃

盃洗

〔寛天見聞記〕盃あらひとて、井に水を入、猪口數多浮めて詠め樂しみ、○略中皆近來の仕出しにて、萬物奢より工夫して、品の强弱にかゝはらず、只目をよろこばす事計りにて、費のみ出來る也、

〔守貞漫稿十八雜服附雜事〕嘉永二年印行、古風ト流布トヲ相撲番附ニ擬スル、其流布ノ方、大關以下左ノ如シ、○略中盃スマシノ井、杯ヲ洗フ井鉢也

臺子　臺盞

〔倭名類聚抄十六漆器〕酒臺子　辨色立成云、酒臺子、志利佐良、今按所出未詳、

〔箋注倭名類聚抄四漆器〕按酒臺可以居瓶、臺子可以居杯、非一物、○略下

〔和漢三才圖會三十一庖厨具〕酒臺子

按酒臺子、倭名抄載東宮舊事云、漆酒臺、志利佐良今俗云渡盞、毎居杯下、棄餘滴也、